

—大学動物病院の活動の現状とさらなる発展を目指して (Ⅳ)—

北里大学獣医学部附属動物病院の現状と課題、 そして参加型臨床実習への思い

伊藤直之[†] (北里大学獣医学部附属動物病院病院長)



1 はじめに

北里大学獣医学部附属動物病院は、小動物診療センターと大動物診療センターから成り、現在、総勢約40名の教職員が日常の診療関連業務に従事している。他大学と同様に、本学附属動物病院の使命は、学内的には1学年約130

名の学生に対する参加型臨床実習をはじめとした臨床獣医学教育の実践の場であると同時に、臨床研究を遂行する場として機能することにある。また、対外的には地域社会における二次診療施設として、充実した設備と知識・技術を兼ね備え、高度な獣医療を提供することで飼い主や一次診療獣医師の要望に応えることが求められている。さらに、臨床獣医師の卒後教育や生涯学習の拠点としても、その責務を果たす必要がある。

これらのことについて、本学附属動物病院の現状と課題、そして将来的な展望を述べることとする。

2 診療体制及び運営の現状と課題

2019年4月1日現在、22名(小動物診療センター15名(図1)、大動物診療センター7名(図2))の教職員が日常の診療業務に従事し、他に、小動物診療センターでは5名の研修獣医師と4名の動物看護師が勤務し、また、大動物診療センターでは1名の技能職員が診療をサポートしている。各教職員は、それぞれが担当する診療科のエキスパートとして、自己研鑽に努めるとともに、講義・実習や大学の公務に追われる中で診療業務をこなしている。人力的にはここ数年、退職者の補充が急務である時期もあったが、特任教員の採用や欠員の充足などにより、現在は不都合が生じる状況ではない。しかしながら、現状ですべての症例に対応できる診療体制が整備されているかと言えば、残念ながらそうではない。来院動物の疾患は多岐にわたり、また、今年度からの参加型臨床実習の本格的な開始も考慮すれば、診療科の充実とそれに

伴う臨床教育の充実が求められている。

一方、診療担当の教職員が症例の診察と参加型臨床実習の学生に対する指導を同時に行うことは困難なことがある。他の教職員や研修獣医師の補助が必要となる。にもかかわらず、実際には研修獣医師が同時に進行している外科手術や麻酔管理が必要なCT/MRI等の検査で不在の場合があり、これらのことから、特任を含む教職員や研修獣医師の増員が必要であると思われる。同時に、「働き方改革」が叫ばれている昨今、過剰労働にならないための配慮が求められており、人員の補充のみならず、効率よく稼働する仕組みを確立することが急務である。

本学附属動物病院の1年間における診療のべ頭数は、ここ数年、小動物が約8,800~9,200頭で推移しているのに対し、大動物は4年前までの1,500頭前後から徐々に増加して、昨年は約2,700頭に達した。これらの数値は、いずれも地方大学のものとして決して劣るものではなく、臨床獣医学の教育や研究に必要な頭数は確保されていることを示している。小動物、大動物ともに国内での飼育頭数が減少している中、一定の診療頭数が確保できていることは、二次診療施設としての期待感の表れなのかもしれない。特に、大動物の症例数が確保され、自前で参加型臨床実習が可能な利点は大きい。このような利点を無駄なく十分に生かすために、どのような運用がベストなのか、議論を尽くす必要があるだろう。

動物病院の運営に当たって、いくら教育病院であるとはいえ、年間どれだけの収入があるかは大きな問題である。当然ながら、収入の減少は予算の縮小に直結し、人員計画や診療と教育に必要な機器類の更新・新規導入等に大きな影響を及ぼすこととなり、診療業務に携わるスタッフのモチベーション低下にもつながりかねない。本学では、2008年(平成20年)5月に小動物診療センターが新築され、その後の収入は緩やかながら右肩上がりであったが、2015年度をピークに2年間の減少が続いた。幸い、昨年度(2018年度)はスタッフ各人の努力と欠員の補充により新たな戦力が加わった効果もあって増収に転

[†] 連絡責任者：伊藤直之(北里大学獣医学部附属動物病院)

〒034-8628 十和田市東二十三番町35-1

☎ 0176-24-9436 FAX 0176-22-3057

E-mail : naoitoh@vmas.kitasato.u.ac.jp



図1 小動物診療センター 外観



図2 大動物診療センター 外観

じた。しかしながら、他大学と比べると、診療頭数の割には概して収入が少ない傾向は変わっていない。個々の診療内容が異なることから一律に比較することはできないが、本学附属動物病院が完全な二次診療となっていないことや地域の所得水準を考慮して診療費を控えめに設定していること、産業動物の占める割合が大きいことなどがその要因であると推測される。逆に、今の診療費設定であるから診療頭数が確保できているといえるのかも知れず、悩ましいところである。また、特に小動物診療センターでは、新築時に導入した高額の大型機器が軒並み老朽化し、更新の時期を迎えているが、費用を捻出する目途が立たず、その一方でメンテナンス費用がかさむ状況になっているため、早急な解決が望まれる問題である。

3 臨床獣医学の教育と研究における附属動物病院の現状と課題

大学の附属動物病院として最も重要な役割は、実践を伴った臨床獣医学の教育であることに疑う余地はない。同時に、大学の附属施設であることを考慮すれば、臨床獣医学の研究や情報の発信にも寄与する存在でなければならない。では実際に、本学の附属動物病院はこれらに十分に活用されているだろうか。実践を伴った臨床獣医学の教育としては、参加型臨床実習である小動物病院実習及び大動物病院実習等で5年生の全学生に活用され、また、6年生の臨床実習でも活用されている。さらに、臨床講座の学生にとっては、日々の診療に参加することも臨床教育の一環であり、施設としての使命を果たしている。しかし、まだまだ様々な点で改善の余地があると思われる。その一つとして、動物病院は高学年の臨床実習で利用されるだけの施設であってはならず、もっとオープンに普段から活用されるべきであり、全学年の学生が何らかの形で動物病院を利用して学習する仕組み作りが必要である。同様に、学部の附属施設であることを考えれば、獣医学科以外の学生教育にも活用されなければならない。

研究面での活用はどうだろうか。動物病院内の検査室

にある分析・測定機器は、外来症例の検査だけでなく、学部学生の卒業論文研究でも頻繁に利用されている。また、それ以外の機器や設備も必要に応じてそれぞれ使用されている。しかし重要なことは、機器や設備の利用によって得られた成果が、どれだけ学外へ向けて学術的な情報として発信されているのかだと思われる。この観点から評価すれば、本学附属動物病院はその使命を十分に果たしているとはいえず、自らを省みても忸怩たる思いがある。折角、金銭的な負担と時間及び労力を費やして入手した研究成績であればこそ、自己満足に終始することなく、積極的に結果に基づいた情報を発信し、多くの研究者や獣医師と共有することで社会貢献に寄与する必要がある。その結果として、新たな人との結びつきによる研究の発展や紹介症例数の増加、さらには研修獣医師の希望者増加が期待されるだろう。症例の各種データについても類似した状況であり、膨大な情報が眠ったままであることから、それらを教育と研究に有効活用する方策を検討しなければならない。われわれ教員が研究成績や臨床データを文章としてまとめ、それを学生が読むことで、科学的に裏付けられた論理的な考え方を学ぶであろうし、また、蓄積された個々の症例におけるデータを解析・公表することで、病態の解明や治療法の開発に寄与できるかもしれない。

学外への情報発信は、卒後教育とも関連してくる。現在、様々な臨床獣医学関連の学会・研究会等が、認定医や専門医の養成を目的としたセミナーを頻繁に開催し、卒後教育の一端を担っている。これに対して本学附属動物病院がどれだけ獣医師の卒後教育に貢献できているかと言えば、特に最近の2年間程は、周辺獣医師を対象とした卒後教育セミナーがほとんど開催されておらず、憂慮すべき事態であったことから、新年度(2019年度)からは毎月1回程度の開催を目指して努力中である。臨床獣医師への卒後教育セミナーによって、互いにより強固な信頼関係を築き上げることが、附属動物病院の発展と臨床獣医学教育の充実につながるものと確信している。

その他としては、ここ数年、大学間の国際交流協定が締

結されているタイ王国マハナコン工科大学獣医学科の学生数名が休暇を利用して来日し、本学附属動物病院での臨床研修を体験している。さらに今年度は、日本獣医師会からの委託事業であるアジア地域臨床獣医師等総合研修事業に参加し、ベトナムからの研修生1名を受け入れ、動物病院での実習も予定されている。海外からの研修生を積極的に受け入れることで国際交流が進み、さらに研究者レベルでの交流へと発展することを期待している。

4 参加型臨床実習

参加型臨床実習の拠点である附属動物病院は、大学内では一般社会との直接的な接点があるまれな施設である。地方の小都市で、しかも大学というある意味閉鎖された環境の中で、学生、あるいは教員も含めて多少のことは許されるというような甘い考えが普段からあることは否定できない。しかし、附属動物病院での参加型臨床実習において、そのような気の緩みは、社会から厳しい評価を受けることになる。

さて、参加型臨床実習が必要な理由は、獣医学教育の充実・改善の取組の中で、社会的要請に応えるため、これまでの見学型実習では養成することができなかった実践的な獣医師を社会に送り出すという使命に基づくものであり、その指導に当たる教員の責任は重大である。特に本学においては、最近、次第にその割合が減少してきたとはいえ、卒業生の60%以上が臨床へ進んでいる現状を考慮すれば、参加型臨床実習の充実は、多くの学生が望んでいることに違いないし、それに応える義務がある。

ところで、参加型実習が目指す“実践的”とは、いったい何を意味しているのだろうか。解釈の仕方は千差万別であり、正解があるわけではないが、獣医師としての疑似体験をすることで問診や身体検査、簡単な処置などのテクニックが習得できれば、それが“実践的”ということになるのだろうか。単に臨床の現場へ行く学生が、即戦力となることを期待したものではないはずである。私見を述べれば、基本的なテクニックの習得は大切なことだと思うが、それだけで十分だとは思われない。参加型臨床実習の本質は、実際の症例及び飼育者と真摯に誠実な態度で向き合い、ありふれた表現だが、病気の動物とそれをケアする飼い主の心の痛みを知り、獣医師として何ができるのか、何をしなければならないのかを自問自答し、症例の病態や診断・治療法について学生同士や教員と真剣に論議することで、最善の方法を見いだすことだと理解している。そして、症例へどのようにアプローチするかを考え、飼い主への丁寧な説明ができるようになれば、“実践的”な獣医師に一歩近づいたことになると考えている。

もちろん、これらのことは参加型臨床実習が目指すところの一部に過ぎないことは承知している。また、限ら

れた実習時間の中で、これらのすべてをクリアすることは困難だと思う。しかし、少しでも実践的な獣医師に近づくためには、指導する教員も症例やその飼い主に対して、さらには学生とも真摯に対峙して互いに自らを高めようとする努力が必要だと感じている。

獣医師と飼い主との信頼関係は、獣医療の遂行に必要な不可欠のものであることは周知のとおりであるが、一方でわれわれ獣医師のほんの些細な言動が飼い主の心を傷つけ、それまでの信頼関係が一瞬にして崩れ去り大事に至ることは、多かれ少なかれ誰もが苦い経験として持ちあわせているに違いない。このような獣医師と飼い主とのすれ違いの多くは、コミュニケーションの不足によって意思疎通に齟齬があり、説明や確認（すなわちインフォームドコンセント）の欠如があると飼い主が感じることで、獣医師に対して抱く不信感に起因している。病気の動物から直接、事情を聴取することができない獣医療において、飼い主とのコミュニケーションを良好に保つことは、最も重要かつ根幹を成すものである。

参加型臨床実習においても、実際に問診の聴取で飼い主と会話する機会があり、また、獣医療は飼い主の了承からスタートするものであることを考えれば、コミュニケーション能力を高めることはきわめて重要な事項であり、常にそのスキル向上に努めることが求められる。学生に限らず、ソーシャル・ネットワーキング・サービス（SNS）の発達・普及によって、人と人とが直接向き合って会話することが少なくなってきた現代において、誰とも会わず、肉声で会話することもなく一日を過ごすこともまれなことではなくなってきた。相手の顔をみながらその言葉と表情から先方の考えや感情を読み取り、その意思を尊重しつつ、こちらの考えに同意してもらうためのコミュニケーションは、かなりの労力を消費しなければ成り立たないものである。参加型臨床実習によって、自らが症例及びその飼い主と関わりを持つことで、これまでの見学実習とは異なり、学生は現実的に物事をとらえる必要性に迫られ、診療は中途半端な心構えでは成し得ない行為であることを理解し、また、責任ある言動を心がけるようになることを期待する。そして指導する教員は、身をもってそれらを教示できる存在でなければならない。

以上のような他者との信頼関係構築や心のこもったコミュニケーションは、臨床の場に限ったことではない。実際には互いに協力することで社会は成り立っていることから、どのような道に進んでも必要とされるものであり、参加型臨床実習の経験は、必ずや将来的に生きてくると確信している。併せて、一症例の診療を完結するために、どれだけのスタッフの協力が必要か（チーム医療の必要性）を理解して欲しいものである。

これまで述べてきた内容をみると、臨床は厳しいこと

ばかりだと思われがちだが、そんなことはない。飼い主との信頼関係を基に、症例が的確な診断と治療を受け、回復していく姿を体験することは大きな喜びであり、飼い主からの心のこもった感謝の言葉があれば、なおさらである。したがって、参加型臨床実習は、実に多くの内容を含んだ実習だということができ、大学教育の最後の実習として、また、間近に迫った社会へ出るための第一歩であると捉えて、充実したものにしなければならない。

本学の参加型臨床実習では、小動物、大動物ともに5年生で附属動物病院を利用してベーシックな実習を行った後、アドバンスを5年生の後期末から6年生の前期にかけて学内、もしくは大学が指定する診療施設で履修することになっている。学外での実習では、二次診療が主体の大学附属動物病院とは異なり、健康診断や予防など

ホームドクターとしての役割や各症例及び飼い主の多様性、そしてそれに対応する臨床獣医師の柔軟性や苦悩などを学んで欲しいと考えている。また、周産期疾患や小児科疾患など学内の実習では遭遇する機会が少ない症例についても経験するチャンスに恵まれていると思われ、それらの領域に関する教育を期待するものである。

最後に、少子化による影響で大学への進学人口が減少し、各大学は生き残りをかけてますます努力しなければならない状況となっている。獣医系大学も例外ではなく、特に地方大学にとっては厳しい状況が予想される。そのような中で、それぞれの大学がどのような特徴ある教育を実施していくかは、受験生に対して大きなアピール・ポイントとなるに違いない。附属動物病院が主体となる参加型臨床実習の内容が、本学の獣医学教育における特徴の一つとなるよう努力したいと考えている。